

本誌では義肢装具に関しては連載等でたびたび取り上げ、1997年1月には「装具療法再考」として、痙性、小児の骨関節疾患、対麻痺など各種疾患に関しての装具の話題を特集しました。今回は疾患別ではなく、体幹、上肢、下肢など、部位別に装具に関する話題を取り上げてみましたが、この分野の第一線で活躍されている先生方に、装具の最近の進歩、新しい装具の紹介、材質などの問題を中心に執筆をお願いしましたので、装具に関する最新の知識を学ぶことができると思います。

■**体幹装具** 体幹装具は、脊柱の安静・免荷・固定、変形予防、矯正を目的に作製され、現在でも保存療法の一手段として重要な役割を担っている。とくに最近では高齢者の骨粗鬆症を基盤とする脊椎圧迫骨折が増え、これに対する装具がいろいろと工夫されている。また、頸椎装具の制動効果、ダーメンコルセットの効果のメカニズムなどに関する研究が盛んとなり、体幹装具の効果を科学的に証明しようとする試みがなされるようになってきている。(中間季雄氏ら、903頁)

■**上肢装具** この分野に関しては残念ながら目立った進歩はみられないが、従来患者個人に合わせて個別に作成されていたものが、成型済み装具ないし既製品装具の形で提供される傾向になってきている。上肢装具の効果に関しては、多症例での比較が難しいため、科学的根拠を明確にした研究は少ないが、治療用補助具として、また動作解析のための装具などの新しい装具が開発されている。(古川 宏氏ら、909頁)

■**下肢装具；小児** 小児の装具に関しては、成人で確立された技術の小児への拡大という観点と、小児特有の装具の進歩という観点の2つの面から捕える必要がある。前者の例としては、従来、小児では限られていた継手の種類が増え、選択肢が拡大されてきている。また、成人脳卒中で使用される調整式装具が小児にも導入されるようになり、さらに新たな素材の利用による装具の軽量化も図られている。後者の例もいくつか挙げられており、アドフィット AFO、タウメル継手を用いた AFO などが紹介されているが、効果の検証の困難さなどが今後の課題として残されている。(根本明宜氏、915頁)

■**下肢装具；成人** 近年の成人下肢装具の大きな流れとしては、材料面の変化と継手式プラスチック短下肢装具の登場が挙げられる。材料としては従来のプラスチックに加え、より軽く、強度も高いカーボン樹脂製の装具が注目されているが、問題点も多く、利点・欠点を踏まえうえでの処方が望まれる。脳卒中のプラスチック短下肢装具は足継手をもたないものが多かったが、歩行解析の結果を取り入れ、足関節の底屈運動を制御する継手付き短下肢装具が開発され、より幅広い選択のできる時代となっている。(牧野健一郎氏ら、919頁)

■**靴型装具** 靴型装具の作製に関しては、その製作過程におけるコンピューターの導入が注目されている。適合性や復元性の改良および製作期間の短縮を目的としたもので、かなりの成果を挙げているが、製作途中の人による手仕事の介入を完全になくすことはできないのが現状である。材質については、用途に応じた各種材料の開発が進んでいる。また、関節リウマチなどの疾患のみならず、小児用、スポーツ用など多種類の既成靴が流通するようになり、材料やデザインについての品揃えも豊富になってきている。(浅見豊子氏、925頁)